明治後期から昭和初期における職工寄宿舎に関する評価

— 宇野利右衛門の著述に基づく労働者居住施設の歴史的考察 その1 —

THE CONTEMPORARY EVALUATION OF WORKERS' DORMITORIES
IN THE EARLY 20TH CENTURY

A historical examination of workers' dwellings based on the writings of Riemon Uno Part 1

平井直樹*, 石田潤一郎**, 池上重康***

Naoki HIRAI, Jun'ichiro ISHIDA and Shigeyasu IKEGAMI

This paper examines the writings of Riemon UNO and his association, Kogyokyoikukai, focusing on workers' housing especially dormitories. It can be read how the third party grasped the matters relating to workers' dormitories. They introduced the "model" dormitories from the point of view of the sound development of industries in Japan. On the assumption that the primordial matters behind of the dormitory system cannot immediately be solved, "model" dormitories were as cases that should be referred to for a problem how improve them while making use of an advantage in protection and the management of the workers.

Keywords: Riemon UNO, Kogyokyoikukai, Workers' housing, Dormitory, Spinning industry

宇野利右衛門, 工業教育会, 労働者住宅, 寄宿舎, 紡績業

1. はじめに

本研究は、明治後期から昭和初期にかけて、日本の労働問題に携わっていた宇野利右衛門（1875—1934年）の活動に注目し、労働者居住施設に関する著述の全体像を明らかにするとともに、とくに職工寄宿舎に関する言及を取り上げて歴史的考察を行うものである。

明治中期頃から、いわゆる底辺ルポルタージュを通して工場における労働者の生活実態が暴き出されるようになり、工場法（1911年公布、1916年施行）の制定に向けた公的な調査を経て、劣悪な住環境の改善は社会的課題として広く認識されるようになる。また、企業においても労働力の確保や労働効率の向上を目的として居住施設を含む福利施設のあり方が考究されるようになった。労働者の居住施設については、近年、個別事例の研究蓄積が進んでおり、工場や企業ごとにさまざまな試みがなされ、必ずしも従来言われていたような劣悪な住環境とは限らなかったことが明らかにされてきている¹⁾。しかしながら、当時、それらが企業の枠組みを超えてどのように捉えられていたかについては更なる検討を要する。

管見では、建築や住宅に関する同時代の専門雑誌は、こうした企業や工場における労働者の居住施設の実態やそれを改善する取り組みについて、いわゆる中流住宅以上の住居に比べると断片的にしか取り上げておらず、俯瞰的な視点を持ち得ていない。そのような中で、本研究で取り上げる宇野は、建築の専門家ではなかったが、日本各地の工場における居住施設のあり方を具体的かつ継続的に紹介

している。次章以降で詳述するが、居住施設のあり方について、参照すべき事例を関係する制度とともに提示し、時にはより踏み込んだべき姿を示した。宇野は独立した立場で活動を行っており、その著述からは、使用者とも住民たる労働者とも異なる第三者の目からみた労働者の居住施設に関する同時代の評価を知ることができる。と考える。

宇野については、すでに、労務管理史の視点から宇野の事績を詳細に明らかにした研究²⁾、大正期の職工訓育論と労働意思管理論に関する言及から宇野の社会経済史的な意義を明らかにした研究³⁾、大正期の日曜必需品市場問題と通勤職工問題に対する言及に着目した経済史研究⁴⁾がある。それらの成果によって、現在では、宇野は労使の間に入って潤滑油的な仕事をする中間指導者として活躍したことが知られており⁵⁾、その著述は「大正期から昭和初期にかけての、労働問題に関する第一級の資料」ととらえられている⁶⁾。建築史の分野においても、宇野の著作は、当時の社宅や福利施設の建築的様態を伝える資料として用いられてきたが、その紹介は断片的であり、宇野による労働者の居住施設に関する著述の全体像や職工寄宿舎に関する内容について十分に議論されているとはいえない⁷⁾。

本研究では、まず、既往研究の成果を踏まえ、宇野と工業教育会による出版物を調査し、労働者の居住施設に関する著述を媒体ごとに把握する。そのうえで、とくに居住施設における寄宿舎のとらえ方、寄宿舎の建築に関する著述の内容を当時の状況に鑑みて考察す

本稿は、特別奨励[若手奨励]委員会の報告書『企業経営都市の盛衰とその空間構成』の一部を大幅に加筆、再構成したものである。

* 京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科
大学院生・修士(工学)

** 京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科 教授・工博

*** 北海道大学大学院工学研究院 助教・博士(工学)

Graduate Student, Graduate School of Science and Technology, Kyoto Institute of Technology, M. Eng.

Prof., Graduate School of Science and Technology, Kyoto Institute of Technology, Dr. Eng. Assistant Prof., Graduate School of Engineering, Hokkaido University, Ph. D.

る。資料として、主に、法政大学大原社会問題研究所（協定会文庫）所蔵資料、大阪府立図書館所蔵資料、国際日本文化研究センター図書館（間文庫）所蔵資料、京都大学経済学研究科・経済学部図書館所蔵資料を用いる。また、間宏監修・解説によって復刻されている著作の一部⁸⁾も合わせて参照する。

2. 宇野利右衛門と工業教育会の活動

宇野利右衛門は、1875（明治8）年8月に旧家の長男として生まれたが、家庭の事情から下級の職工生活を経験し、後に労働問題に携わるようになった。1901（明治34）年に和田助一らが創立した労働青年会に入会し、和田が主宰する大日本職工教育会が発行していた雑誌で執筆活動をはじめた。1905（明治38）年7月には、雑誌『工業之大日本』で「鐘紡の職工待遇法」の連載を開始。同年に大日本職工教育会が工業之日本社に合併されると、同社に勤務して『工業の花』や『工業之大日本』の編集に従事した。1908（明治41）年から大阪合同紡績天満支店で職工寄宿舎係として実地の経験を積んで翌年に退社。同年、大阪市北区角田町341に工業教育会を設立し、1934（昭和9）年2月に亡くなるまで、終生、独立した立場で活動を続けた。この間に、国際労働機関（ILO）の労働代表に立候補している。1919（大正8）の第一回総会の際は選出に至らなかったが、1923（大正12）年の第五回総会の際に選出されている。

工業教育会は、1919（大正8）年時点で、総計22名の小規模な組織であった。主事は宇野利右衛門、理事は田邊恒之が務め、編集部には岩崎鼎ほか5名、事務部には廣島平太郎ほか6名、会計部には宇野悦子ほか2名、東京支局には主任の橋村松治郎ほか3名が在籍した⁹⁾。同会は常に宇野の直接的な指導下であり、宇野の死去とともに活動を終えた。工業教育会の活動は、著述・出版活動、有料労務相談、各種研究会、講習会・講演会の開催、労働法規に即した工場諸規則の制定・受託、工場懇話会の主催、模範工場見学会など多岐にわたった。

3. 労働者の居住施設に関わる著述

（1）工業教育会設立以前の著述

工業教育会設立以前の主要な著述は、1905（明治38）年7月から雑誌『工業之大日本』において、「漁火生」のペンネームを用いて「黒潮生」との連名で連載した「鐘紡の職工待遇法」である。『工業之大日本』は、日露戦争中の1904（明治37）年7月に大阪で創刊された実業雑誌で、市場や技術に関する情報のほかに社会問題や労務問題、政治家、実業家、学者による論評など幅広い内容を扱っている。宇野らの連載も日本の工業に関わる記事のひとつであった。

この連載では、多くの工場の合併・買収後に職工待遇の改善を図っていた鐘淵紡績に焦点を当て、工業における職工待遇の重要性を説いた。労働者の居住施設については、「第三章 寄宿舎に於ける職工優待」「第四章 社宅に於ける職工優待」で、写真とともに様態を示し、採光・通風など衛生面における改善や上下水道、ガス、電燈といった設備の充実を報告している。また、慰安・娯楽、保健・衛生、教育、経済に関する附属施設のあり方や周辺環境を改良・保全するための制度についても細かく記述した。制度や思想と施設そのものの双方に目を配り、企業における職工待遇のあり方を体系的かつ具体的に記述した先駆的な仕事であった。

（2）会員向け定期刊行物

工業教育会の著述・出版活動の中心となったのが、模範的施策を取り上げる冊子の発行であった。労働者の居住施設に関連するものとしては、職工問題全般を取り扱った『職工問題資料（A輯-G輯）』、鉱業に特化した『鉱夫問題資料（普通号・特別号）』、製糸業に特化した『製糸工場資料』、海外における労働問題に焦点を当てた『国際労働問題資料』がある。これらは、いずれも一冊につきひとつのトピックを取り上げる小冊子で、市販ではなく、有料の購読会員に配布するという形がとられた。

これらの中で特に重要なのは『職工問題資料』である。宇野のライフワークとして、全ての活動の基盤となった。取材にあたっては、宇野自らが各地の工場や鉱山に赴き写真を撮影した。それぞれの冊子は15頁程度であったが、1910（明治43）年から1934（昭和9）年まで計2255冊が発行された。当初の配布先はわずかであったが、1915（大正4）年には297工場と17人に、1921（大正10）年には約1600工場に配布されるようになったとされる。

『職工問題資料』は、内容別にA輯からG輯に分類され、このうち、A輯とF輯で労働者の居住施設と関係が深い記事が掲載されている。A輯は1910（明治43）年より原則月3回発行され、F輯は1916（大正5）年より原則月1回発行された。A輯については参考文献2)でリスト化されているが、F輯についてはこれまでその全貌が明らかでなかったため、¹⁰⁾各巻の題と取り上げられている施設の工場名をリスト化して表1に示した。

A輯は、「一般職工待遇に関する事例・調査・意見」を紹介したものであり、居住施設に関しても多角的なアプローチが試みられている。発行が開始された明治末期から、社宅に関する記事¹¹⁾、男工寄宿舎の整備を推奨するもの¹²⁾、一企業の制度と施設を取り上げた記事¹³⁾が掲載された。大正期に入ると施設の写真が数多く載せられるようになり、職工が自らの住宅を取得する制度の紹介¹⁴⁾や、建築図面を含むより具体的な事例の提示¹⁵⁾なども見られる。F輯の発行開始にともなって、写真を中心とした記事は減少したが、明確な問題意識を持って社宅や寄宿舎のあり方を追求した記事¹⁶⁾が見られるようになった。また、大正から昭和初期においては、寄宿舎の取締規則に関連する記事¹⁷⁾も多くみられる。

F輯は、「模範的職工待遇施設の写真・説明」と題しており、社宅や寄宿舎といった居住施設、食堂、診療所、幼稚園、運動施設などの福利施設を取り上げている。写真と解説から構成されており、労働者の住環境を視覚的に捉えることが意図されている。国内48企業130工場・施設の掲載が確認でき、繊維業の工場が大半を占めている。とくに分工場を持つ紡績会社が多く、鐘淵紡績は23工場・施設、東洋紡績は17工場、大日本紡績は11工場、倉敷紡績は8工場にも及ぶ。このほか、労働者のための大阪市営住宅や共同宿泊所、結核患者のための近江療養所など公共的な施設も含まれる。

また、『製糸工場資料』は、宇野が長野県及び東濃地方における製糸工場の職工待遇に数多くの欠点を認めたことを契機とし、製糸工場に特化した資料として発刊されたものである。1921（大正10）年に月1回のペースで1年間だけ発行され、数百工場の定期購読者を得ていたとされるが、『職工問題資料』に併合するという形で廃刊された。わずか12冊の発行であったが、製糸工場女工寄宿舎のあべき建築について具体的に言及した記事を残している。

（３）一般誌

工業教育会は実務家向けの一般誌も刊行している。そのうち、居住施設に関わる記事が多く掲載されてものとして、『工場法雑誌』および『大工業』があげられる。前者は、1918（大正 7）年 1 月に工場法の周知徹底を図る目的で発刊された雑誌で、後者は前者を引継ぎ、労働問題を中心に据えながらより幅広い内容を扱った工業雑誌である。月 1 回の発行で第 3 巻第 4 号（1920 年 4 月）まで発行された。発行期間は短く、商業的には失敗に終わったともいえるが、『工場法雑誌』創刊号には 53 企業、『大工業』改題号（第 2 巻第 1 号）には 118 企業が広告を掲載している。また、『工場法雑誌』の創刊時には、農商務省商工局長の岡實が祝辞を寄せ、工場法規の周知における本誌の意義を述べている。

宇野や本誌記者であった江村郊邨¹⁸⁾らの記事以外に、建築、都市、衛生、社会事業、法律、行政などの専門家から広く論考を集めている。農商務省商工局長岡實、専売局技師神田孝一など労働問題の第一線にいた各氏の連載記事や、居住施設に関連するところでは、片岡安¹⁹⁾、葛野壮一郎²⁰⁾、大熊喜邦²¹⁾、関一²²⁾、石原修²³⁾、豊原又男²⁴⁾、三宅勘一²⁵⁾らによる記事が掲載されている。これらは、トピック形式の会員向け定期刊行物を元に、意図をより明確にして一般向けに刊行された雑誌であったといえる。

居住施設に関しては、第 2 号第 2 巻と第 3 号 4 巻で特集を組んでいる。日本の工業界の発展という視点から職工住宅の改善の重要性を述べている²⁶⁾。特集号の記事には、古い職工住宅の問題点の指摘²⁷⁾、懸賞設計による「理想的職工社宅」入賞案の公表²⁸⁾、さまざまな労働者居住施設の美点と欠点についての考察²⁹⁾、社宅整備に関する実態調査³⁰⁾などがある。

（４）書籍

宇野は労働問題を中心に多くの書籍を刊行しており、労働者の居住施設に関わるものもいくつか見られる。

まず、『職工問題資料』の初期の記事がまとめられ、1912（明治 45）年に『職工問題資料 第一輯』として刊行されている。労働者居住施設に関する具体的な記述は少ないが、自ら撮影した社宅、寄宿舎、福利施設の写真が 84 枚収録された。翌年には、『職工問題資料 第二輯 職工の住居と生活』をまとめている。ここでは、労働者居住施設のあり方についての自らの考えを示し、とくに職工社宅の重要性を説いている。また、巻頭には模範的な社宅や福利施設の写真が 16 枚掲載されている。

また、工場の施設や制度のすべてが模範的であると宇野が認めた工場については、『模範工場日光電気精銅所』（1914 年）、『帝国製麻大阪製品工場』（1922 年）、『汗愛の靈火に輝く模範工場東洋紡績姫路工場』（1927 年）といった単行本にまとめている。これらは、『工業之大日本』における「鐘紡の職工待遇法」、『職工問題資料』における「倉紡の職工待遇法」に続いて、企業あるいは工場全体の福利施策のあり方を体系的に記述したものであった。

4. 労働者の居住施設における寄宿舎のとりえ方

宇野は、自身も認めているように、日本の工業を牽引していた綿糸紡績業の工場における女工のための施策を取り上げて、工業界一般の職工待遇策を論じようとする傾向があり、活動初期においてとくに顕著であった³¹⁾。

1905（明治 38）年、「鐘紡の職工待遇法」で、寄宿舎における職工優待について記すのに先立って次のように述べる。

綿糸紡績工場に於ける寄宿舎なるものは、其の事業の上に頗る大なる関係を有して居るがため、何処の工場に於ても常に鮮少なからざる費用を投じ、特に多大の注意を払ふて其設備の改善に努めて居るので、職工問題の為に費やさるゝ思慮の大部分は、実に寄宿舎の制度に懸て居るのである、故に吾人は本章に於て特に鐘紡がその点まで此方面に工夫しつゝあるかを記述せざるを得ないのである

主たる労働力が若年の女工であった綿糸紡績工場では、工場運営と寄宿舎制度に強い関係があり、施策や施設の改善が職工問題において重要な位置を占めているという認識を示した。ここで鐘淵紡績が特筆されるのは、職工の確保や能率の向上などの観点から先進的な取り組みを行った企業のひとつが鐘淵紡績であり、ちょうどこの時期に「大家族主義」と称される一連の施策の導入が進められていたからである。

寄宿舎については、大正期以降も継続的に取り上げているが、藤田貞一郎も指摘しているように³²⁾、宇野は、広い意味での通勤職工（この場合の通勤には、社宅からの通勤を含む）を基本形態とする永続的な賃金労働者層の確立を目指していた。

1913（大正 2）年、『職工問題資料 第二輯 職工の住居と生活』において、宇野は、労働者の居住施設を、通勤（自宅や下宿屋など企業外の居住施設からの通勤をさす）、寄宿舎、社宅の三種類に分けてとらえ、現時点で寄宿舎が多用されている背景には、長時間におよぶ労働と深夜業の問題、出稼ぎ型職工の収容と管理の問題があることを示した。そのうえで、「我が工業の欠点と、職工の弱点とに基いて出来た処の制度であるから、現今の工業界の状態では、これを全廃する事は出来ない」と述べ、現状においては必要性を認めざるを得ないが、将来的には他の方法に移行すべきであるとした³³⁾。

この考え方はその後も本質的には変わっていない。1920（大正 9）年には、『大工業』の記事において、労働者の居住施設を自宅・社宅・借間・下宿・寄寓・合宿所・寄宿舎の 7 種類に細分化してとらえ、便利、経済、衛生、永続、品性、趣味の 6 つの観点から検討を加えた。寄宿舎については、現時点では必要で便利ではあるが、決して経済的ではなく、衛生的にも危険が多い上、なによりも永続的ではないとして、「到底これを将来の職工策に重用し得べき見込なからしむるもので、多少の改善を加へて、現在の急場凌ぎに利用する外はない」と位置づけた³⁴⁾。

つまり宇野は、明治期から綿糸紡績業を中心とした近代的な工場の運営において寄宿舎が欠かせないことを認識しており、それを見据えて、寄宿舎における職工待遇について叙述した。大正期以降においては、寄宿制度そのものの限界を十分認識した上で、日本の工業界の現状に鑑みて職工寄宿舎の必要性を認め、参照し得る制度と施設を取り上げていたといえる。

5. 職工寄宿舎の建築についての言及

（１）女工寄宿舎

1905（明治 38）年、「鐘紡の職工待遇法」において鐘淵紡績各支店の寄宿舎の様態を記している。宇野は、まず、鐘淵紡績の寄宿舎についての記述に先立ち、一般的な紡績業の寄宿舎について、「現在

のものは悉く同一弊に陥て居る」とし、今後の寄宿舍の建設においては、「従来の型に着眼することなく、一切のものを忘れて」多数の出稼ぎ女工を保護する観点から考案するべきであるとの考えを示す。各支店の建築については、兵庫・中島・熊本を「中央に庭園を設け、両側に同形同大の二階屋を並べる『対楼式』」、久留米を「平屋建ての小屋が、樹木に囲まれて此所彼所に設置せられて居る『臥蚕式』」、住道を「宏壮堅固なる大屋が巍然として構へたる『洋風式』」、博多を「旧式の『平屋造り』の長屋式」、東京を「二階的の一個大なる『対楼式』に似たる」と描写した。居室は、「概して小さからざる方で、十畳乃至三十畳位」であり、「住道支店の少々特色あるのみで、部屋としては他の紡績工場と大差ない」としている。また、先に述べたように、附属施設と制度のありかたについても詳述した。

明治期における紡績業の一般的な女工寄宿舍は、木造2階建ての長屋で、各居室は明治20年代に40畳から50畳だったのが、次第に狭くなり、10畳から20畳になったとされるが³⁵⁾、宇野は、そうした型に拘ることなく考え出された寄宿舍を積極的に評価する姿勢を見せた。この頃の鐘淵紡績は、新たに加わった工場の整備を進めている段階にあり、寄宿舍の建築的様態も支店によって様々であった。住棟の階数、全体の配置、外観の和洋によって分類してとらえているが、この時点では建築としていずれの形式が望ましいか、あるいは今後どのように改善するべきかまでは言及していない。

明治末期から大正期においては、『職工問題資料』A・F輯および『大工業』で、様々な「模範的」な女子寄宿舍を掲載している。

1911（明治44）年、「倉紡の職工待遇法」の連載において、倉敷紡績の「家族的寄宿舍」（写真1）とそれを支える制度のあり方を紹介している³⁶⁾。「家族的寄宿舍」は、平屋建ての建築で1つの住棟は4つの住戸単位（一般の寄宿舍でいう居室あたる）で構成される。住棟を縦に4棟ほど並べたものを、入口と入口あるいは縁側と縁側とが向い合うように平行に配置している。入口の間隔は4間で物干、洗面所、洗濯場等が設けられ、縁側どうしの間隔は5間で中庭になっている。各住戸は6畳、2畳の二間と1坪の土間からなり、定員は5人である。大原孫三郎の「成るべく、自分の家と変わらぬやうにして、少人数で心持よく、睦まじく家庭的に起居する事の出来るやうに」という考え方に基づいて建てられたとされる。全体で一つの施設とする配置は従来の寄宿舍を踏襲したものであるが、便所が別棟に設けられていることを除けば、住棟そのものは社宅に近いものであった。これについて宇野は、「家と家との間隔が広いのであるが^{（ママ）}、光線の射入、通風の都合もよく、小じんまりして真に家庭に起居して居るのと、何の異なる処もない、楽しい心持で居る事が出来るやうになつて居る」と評価している。

写真1 倉敷紡績女工寄宿舍

写真2 合同紡績神崎支店女工寄宿舍

写真3 大日本紡績大垣工場女工寄宿舍

図1 福島紡績堺支店女工寄宿舍配置図

また、1913（大正2）年には、大阪合同紡績神崎支店の女工寄宿舍（写真2）を「家庭式」と紹介している。1棟あたり5つの住戸単位で構成され、それぞれ12畳の寝室と6畳の会談室の二間からなる。建築の正面は長屋の社宅に近いが、裏側は縁側でつながれてガラス張りの障子がはめられており、従来の寄宿舍と同様の建築的特徴も有している。また、各住棟は平行に配置されて渡り廊下で繋がれ、棟と棟との間に便所と洗面所が設けられていた。宇野は、「打見た処、確かに別荘風とも見ゆる、立派な平屋建ての、新式寄宿舍で、此種の設備の中最も勝れた模範的のものである」と位置づけた³⁷⁾。

これらの例からわかるように、宇野が、寄宿舍の建築について、早くから積極的に取り上げた形式のひとつが、「家族的」や「家庭的」と呼びあらわされる少人数の住戸単位からなる平屋建て長屋形式の寄宿舍であった。そして、従来の寄宿舍における大規模な居室に大人数を住まわせることで生じていた、衛生上、風紀上の問題を解決している点を評価していた。

1919（大正8）年には、福島紡績堺支店（旧堺紡績本社）女子寄宿舍（図1）について、詳しい説明や図面・写真を掲載し、「福紡式」と名付けて紹介している³⁸⁾。2階建ての建築4棟を四方に建て、その中央に平屋建て約100畳の大広間を置き、さらにその南側に別棟の住棟を平行に配置している。多数の附属施設を併設する大規模な構成ながら、居室は、16畳の寝室と8畳の集談室、それぞれ4畳の着替室と物置室に分かれており、定員12人の片番制である。全体の配置について、「必しも理想的であるとは云へないが大広間（精神訓育の機関）を全体の建物の中心に置いた点に於て、単に物質的の待遇のみを以て能事とれりと考えて居る一般寄宿舍の構造に比し、確かに一頭地を抜いて居るのである」と述べ、附属施設の配置に注目して女工の精神訓育の場として機能しえる大広間を寄宿舍の中心に配置した点を評価した。また、全体として、「種々の点に於て、細密なる注意を払はれた模範的の寄宿舍」と位置づけた。

1921（大正10）年、倉敷紡績松山工場（旧松山紡績）における

実験的な「分散式寄宿舎」の試みについても「実験から出発した新しい形式」として報告している³⁹⁾。倉敷紡績による松山紡績の買収が工場拡張中に実施され、その結果、女工約 200 人の居住施設が不足した。それに対応するため、倉敷紡績は買収後に工場附近の大規模な民家を借り上げて、50 人から 60 人を収容する小規模な仮の寄宿舎とした。結果的に、市内に点在するこの寄宿舎が、従来の寄宿舎よりも出勤率、勤続率、健康率等においてははるかに優れていたため、その後は、大規模な寄宿舎ではなく小規模な「分散式」の寄宿舎が採用されることになったという。ただ、宇野は、今後の寄宿舎整備においては、職工の取締りや統一、学校、集会所、浴室などの附属施設の設置、食料品の配給などの点からみて、市内の各所に散在させる「市内分散式」ではなく、広い庭園の中に配置する「集合分散式」とする方が便利であろうとの考えを示している。

宇野は、これらの「福紡式」や「分散式」の事例においても、「家族的」や「家庭的」の寄宿舎と同様に、従来よりも少人数単位での生活を実現させている点を評価したが、それとともに、附属施設との関係性や体系的な管理を行う上での利便性や実用性を重視した。明治期以来、日本の紡績業は操業短縮と増産を繰り返しながら全体として規模を拡大したが、日露戦争、第一次世界大戦を経て、資本の集中と大企業による寡占が進行していった。大正期には、工場規模の拡大による職工の増加や深夜業廃止への対応に迫られており、いかにして能率を向上させて経営の合理化を推し進めるかが課題となっていた。こうした状況の中で、労働者の確保と質の向上という観点から、寄宿舎制度そのものの持つ職工の管理と保護における利点を活かすこと、企業内福利施設の充実による体系的な労務管理を実施することの重要性が意識されていたと考えられる。

『職工問題資料』では、これらの他にも、東西に長い 2 階建ての建物が平行に配置された鐘淵紡績大阪支店の寄宿舎（1917 年）⁴⁰⁾、天理教徒を収容して礼拝室や祭壇を設けた富士瓦斯紡績小山工場の寄宿舎（1917 年）⁴¹⁾、樹木や草花に囲まれて庭園化した大日本紡績大垣工場の寄宿舎（1918 年）（写真 3）⁴²⁾、ひとつの住戸単位が 12 畳の寝室と 6 畳の居室の二間からなる倉敷紡績玉島工場の寄宿舎（1918 年）⁴³⁾、平屋建ての住棟を並べて間に樹木を植えた相模紡績平塚工場の寄宿舎（1919 年）⁴⁴⁾、道をへだてた工場とつなぐ地下トンネルが設けられた東洋紡績王子支店の寄宿舎（1919 年）⁴⁵⁾、2 階建ての大規模な寄宿舎でありながら住戸単位毎に入口が設けられている鐘淵紡績下京工場の寄宿舎（1923 年）⁴⁶⁾などを紹介している。

時代が下るにつれ、髪結室、休養室、裁縫室、ホール、浴室といった附属施設や、非常階段、渡り廊下、地下通路、防火扉、暖房装置、電燈、流水式便所、衣装かけなど詳細への言及が増している。

そして、1921（大正 10）年には、『製糸工場資料』の連載記事⁴⁷⁾において、製糸業に適する女子寄宿舎について述べている。宇野は、他の業種も含め、実際に建てられている寄宿舎の形式を 7 種類に分類して分析する。そのうえで、製糸業に適する寄宿舎について、「第一の並行様式を基本として、これに第五の講堂中心式と、第六の花園式とを参酌塩梅したものが、最も理想的であろうと思はれるのである」と記した。ここで宇野が示したのは、いわばこれまで取り上げた寄宿舎の折衷的な建築だったわけである。先に紹介したように、各棟を平行に配置する形式は鐘淵紡績をはじめとする多くの工場、女工の訓育を行う講堂を中心に設ける点は福島紡績各工場、建物の

周りに樹木や草花を配置する形式は大日本紡績大垣工場に代表される。その一方で、第七の分散式として、先に示した倉敷紡績松山工場の「分散式寄宿舎」をあげているが、「理想としては極めて新しく且つ進んだもの」との見解を示しながらも、土地の取得と費用の点で困難が伴うため、一般の工場には応用できないとした。

個々の建築物の形式については、経済上、眺望、通風採光の点において平屋建てより 2 階建てを適当とし、各室の大きさについては、1 室あたり 15 畳 8 人位の「中部屋式」を推奨している。「三十畳四十畳敷の大部屋」は、女工の管理統一が困難である点、伝染病などが発生した場合に危険が大きい点が問題であり、「六畳や八畳の小部屋」は少人数しか収容できないので、大人数を入れるには多くの室数を要する点が設備上不便不利であるとしている。それに加え、室内には押入れと床の間を設けること、採光の窓を大きくして眺望を遮るものを設置しないこと、1 階には濡れ縁、2 階は肘掛を設けること、片廊下式にして廊下を北面、窓を南面に設けることを推奨している。また、「工場寄宿舎取締規則」（愛媛県令第 78 号、1920 年）の一部を抜粋して、それを最低限の基準とすることを求めている。

この点については後述するが、製糸工場における職工待遇の多くの欠点が『製糸工場資料』発行の動機にもなっているように、製糸業の寄宿舎は紡績業の寄宿舎に比べて遜色があった。逆にとらえれば、紡績業の福利施設が大企業によってある程度改善されたことで、寄宿舎の問題は製糸業における問題となっていたともいえる。宇野は自らが示した製糸業の女子寄宿舎のあり方を、「理想的」な女子寄宿舎と表現しているが、それは現実離れたものではなく、製糸業の状況を踏まえて見出した、費用対効果を考慮した汎用性の高い形式であったといえる。

（2）男工寄宿舎

1911（明治 44）年、宇野は、女工に比べて男工の職工待遇に不備が多いことを指摘すると同時に、男工寄宿舎の規模が小さく不完全である点を改善して独身の男工を積極的に収容することを説いた⁴⁸⁾。建築的には K 社の各支店の事例を元にして、一般の女子寄宿舎とは異なる寄宿舎のあり方を示している⁴⁹⁾。平面は中庭を囲む形式とし、1 棟あたり 100 人から 150 人収容することを想定した。居室については、1 室あたり 6 人から 8 人を定員とする、イス座の「洋式」とユカ座の「日本式」の双方の建築のあり方を提示した。

「洋式」の場合は、「室の左右に寝台を整列して、中央には長方形の卓とベンチを設置し、書面位は認める事の出来るやうにしなければなりません、而して各室とも暖炉一個、大戸棚一個を据つけて、此の戸棚には手廻りの物品を入れる事にしますのであります」とし、「日本式」の場合は、「寝室と云ふよりは、坐敷的に構造する方が何彼につけて有効であります、押し入れ戸棚は普通工女寄宿のまゝでもよろしいが、床の間と小さな文机を配列するやうに腰障子を掛める事と、出入口の反対の障子は可成中庭に面するやうにする事とが必要であります」とした。あわせて、居室以外には着替室、読書室、娛樂室を備えることが必要であるとしている。また、「男工寄宿舎は社宅と接近して建設する事が総ての都合上有利であります」と述べ、社宅と共有の倶楽部を設けることも求めた。

大正期においても、『職工問題資料』A・F 輯および『大工業』において男工寄宿舎を取り上げている。1918（大正 7）年には、竣工あるいは建築中の帝国製麻大阪製品工場（図 2）、東洋紡績四貫島工

場（写真 5）、大日本紡績大垣工場（写真 6）の各男工寄宿舎を「理想的男工寄宿舎」として、図面とともに具体的な建築の様態を示している⁵⁰⁾。また宇野は、「寝るだけの家としての設計でない処に真に彼らの幸福な点がある」とその評価基準を明らかにしている⁵¹⁾。

帝国製麻大阪製品工場男工寄宿舎（誠勤寮）は、居室部分のみ 2 階建てになっており、1 階平面はロ字、2 階平面はコ字をなしている。1 階中央に庭園が設けられ、庭に面して廊下がめぐらされている片廊下式である。居室は上下階あわせて、4 畳半が 15 室、6 畳が 3 室あり、いずれも収容定員は 2 名である。居室の片側に押入れを取り、両側に床を設けて、書棚に兼用できるようになっている。1 階には 24 畳敷の集会場兼図書室や娯楽室が設けられている。この寄宿舎については、「規模は左程大きくはないが、設備は頗る理想的なもので、一室の定員は僅かに 2 名で、所謂、小部屋式の寄宿舎である」と位置づけている。

東洋紡績四貫島工場男工寄宿舎は、庭園を囲むコ字形平面なし、間口が狭く、奥行が深い。廊下の両側に居室を設ける中廊下式で、庭側は 10 畳敷、反対側は 8 畳敷の和室になっている。居室は、10 畳敷が 33 室と 8 畳敷が 33 室あり、収容人員は、一室あたり前者が 5 人で後者が 4 人となっている。この寄宿舎には、居室以外に、集会場となる大広間、27 畳の休養室、応接室、読書室、学習室、娯楽所、浴室、食堂等の附属設備が備えつけられており、宇野はこの点を評価して「頗る模範的である」と述べた。

大日本紡績大垣工場男工寄宿舎は、東西に延びる 2 階建ての住棟が庭園の中に平行に配置され、住棟 1 棟につき 12 畳の居室が各階 7 室合わせて 14 室ある。住棟とは棟を分けて、食堂、講堂、病室、教室、大弓場、庭球場、喫煙室、談話室、剣道場、柔道場、遊泳場、洗濯場などの附属設備が設けられている。この工場は宇野が「模範工場」と認めていた工場であったが、新たに建設されることになった男工寄宿舎についても「殆ど間然する処のない理想的男工寄宿舎である」と評価した。

男工寄宿舎は、女工寄宿舎と比べて整備が進んでおらず、設置されていたとしても一般的に規模が小さく不完全であることが多かった。男工の確保が比較的容易であったこともあり、多くの工場においては、単身の男工の住居は下宿屋など企業外の施設に頼っているのが実態であった。そもそも、男工が大半を占めた重工業や鉱業の多く施設においては、長らく間接雇用が行われており、企業の直接的な管理下にすらなかった。体系的な労務管理が充実していく中で、宇野は、長い目で見ても理想的な男工を養成するために、社宅の入居対象でない独身の男工を寄宿舎に収容すべきであるとして、男工寄宿舎整備の重要性と施設のあり方を示した。取り上げられた寄宿舎

図 2 帝国製麻大阪製品工場男工寄宿舎平面図

は、棟を並行配置したものか、その端をつないだ形式で、各居室の規模は小さく抑えられている。また、附属施設の充実や配置に力点が置いて紹介しており、男工を女工よりも自立したものとして捉えて非永続ながらも社宅に近い役割を期待したと考えられる。

（3）寄宿舎の取締規則

大正期には、これまで見たような具体的な施設を紹介する一方で、『職工問題資料』A 輯において国や府県が定めた公的な寄宿舎の取締規則をいち早く紹介し評価している。

1916（大正 5）年には、「工場及附属建設物取締規則」（1916 年 10 月 25 日長野県令第 25 号、11 月 1 日施行）を取り上げた⁵²⁾。第 5 条では「寝室ハ男女ニ依リテ之ヲ區別シ完全ナル区画ヲ設ケヘシ」と明記されており、事実上男女の寄宿舎を分けて設けることを求めた。また、第 6 条では「寝室ノ収容人員ハ寝室内ノ廊下ヲ除キ坪一坪半ニ付二人ノ割合ヲ超ユルコトヲ得ス」とあり、一人当たりの使用面積を 0.75 坪以上とすることが定められている。

宇野は、この県令を寄宿舎の締規則としては「本邦唯一のもの」とであると位置づけている。そのうえで、「此規則は単に長野県のみの方令ではなくして、全国の職工の寄宿舎を有する工場の、採つて以て最低度の定規とすべき法規である」とした。

1920（大正 9）年には、「工場寄宿舎取締規則」（1920 年 9 月 20 日愛媛県令第 78 号、10 月 1 日施行）を取り上げた⁵³⁾。寄宿舎建築における男女の別、片廊下式と中廊下式それぞれの廊下の幅まで細かく定めたほか、第 13 条では「寝室ハ其ノ広サ一室床面積十二坪ヲ超過スヘカラス但シ床面積十五坪迄ヲ許可スルコトアルヘシ」として、かつて多く見られた大規模な居室をもつ寄宿舎が許されなくなった。第 15 条では「寝室ノ収容人員ハ床面積一坪ニ付一人ノ割合ヲ超ユルコトヲ得ス」と記して、一人当たりの使用面積を 1 坪以上とすることを明示しているが、この規定は、長野県令や後の内務

写真 4 鐘淵紡績兵庫支店男工寄宿舎

写真 5 東洋紡績四貫島工場男工寄宿舎

写真 6 大日本紡績大垣工場男工寄宿舎

省令よりも高い基準であった。また、第 30 条には「女子ヲ寄宿セシムルトキハ裁縫室及髪結室ヲ設備スベシ」とあり、女子寄宿舎に特化した設備の備えることを義務づけた。

宇野は、先に取り上げた長野県令について「長野県の幼稚な設備を改善するには、あれでよかつたか知れぬが、一般の標準とするには、未だ余りに低く過ぎる恨みがあつた」と述べたうえで、この愛媛県令は「頗る進んだ綿密なもので、以て一般の標準とするに足る、完全に近い規則である」と高く評価した。

1927（昭和 2）年には、「工場附属寄宿舎規則」（1927 年 4 月 6 日内務省令第 26 号、7 月 1 日施行）の内容を掲載している⁵⁴⁾。この規則は工場法の附属法令であり、工場法の適用を受ける工場の寄宿舎に適用されるものである。この法令では、第 3 条で「寝室ハ建物ノ三階以上ニ之ヲ設クルコトヲ得ス」と定められ、耐火構造物でない一般的な木造寄宿舎の場合は、原則として 2 階建てまでにすることとなった。また、第 9 条で「寝室ハ収容人員一人ニ付室面積（押入及床ノ間ヲ除ク）〇・七五坪ヲ下ルコトヲ得ス」、第 10 条で「寝室ノ収客定員ハ一室ニ付十六人ヲ超ユルコトヲ得ス」と明記され、一人当たりの使用面積の下限が 0.75 坪、一室あたり 16 人以下とすることになった。

これについて、「兎に角貴重な人命を預つて居る、此の種の設備に関し、今迄何等の取締規則も無かつた事は、我が工業界に於ける一大欠陥であつたのであるから、今回此の規則の発布施行を見たことは、吾人の双手を挙げて賛成するところなのである」と述べ、全国の工場附属寄宿舎に適応される取締規則が初めて制定されたこととおおいに評価した。

また、同年には本則の紹介に加えて、大阪、和歌山、京都、福岡、神奈川、栃木、東京、広島、群馬、岐阜、岡山、愛知、宮崎、石川、滋賀、茨城、長崎の各府県の施行細則も掲載し⁵⁵⁾、社会局事務官の北岡寿逸による解説を転載することで同規則の周知を図った⁵⁶⁾。

寄宿舎の取締規則は、寄宿舎の一人当たりの使用面積、一室あたりの規模のほか、建築、寝室、寝具、防火装置、便所、附属施設などのあり方について基準を示すものであった。最初の規則が製糸業の盛んな長野県で制定されたことからわかるように、こうした規則制定の背景には製糸業の問題があったと考えられる。明治期における製糸業の寄宿舎は、長野、岐阜等の地方では、寄宿舎を設けず工場建物の一部をあてたものが多くあり、各室の広さは 10 畳から 20 畳のものが多く 50 畳や 60 畳のものもあったとされる⁵⁷⁾。大正期の調査においては、10 畳以上 20 畳未満の居室が約半数、20 畳以上 40 畳未満の大規模な居室も約 3 割を占めた⁵⁸⁾。

また、内務省令第 26 号（1927 年）に対する、社会局事務官北岡寿逸の解説⁵⁹⁾によれば、製糸業の工場において、数十畳やひどい場合は数百畳の居室に数十人、数百人、を収容するものがあったという。また、この法令の規定に照らすと、製糸業における既存の寄宿舎の多くが、寝室を設ける階数の制限、天井の取り付け、天井高の最低限度、雨戸やガラス戸の未設置などの点で不適格となり、整備を必要とすることが示されている。

これらの公的な規則を一人当たりの使用面積と一室ごとの規模で比べると以下ようになる。長野県令第 25 号（1916 年）は一人あたり 0.75 坪以上とするのみで、一室ごとの規程を設けていないため大規模な居室が可能となる。愛媛県令第 78 号（1920 年）は一人あ

たり 1 坪以上、一室あたり 12 坪以下としているため、自ずと 12 人 24 畳以下に定まる。内務省令第 26 号（1927 年）は、一人あたり 0.75 坪以上、一室あたり 16 人以下であれば大規模な居室も可能で、16 人の場合は 24 畳以上ということになる。いずれも、本章第 1 節で扱った、1 室あたり 15 畳 8 人位とする宇野の示した製糸業に適する寄宿舎よりも大規模な居室を許容しうるものであった⁶⁰⁾。

これらはいずれも、宇野が示した「理想的」な女子寄宿舎に比べれば劣る基準であったが、公的な基準としての意義を認め、長野県令第 25 号（1916 年）は最低基準を定めるもの、愛媛県令第 78 号（1920 年）は標準的な規則と位置づけ、内務省令第 26 号（1927 年）については、これまでにはなかった全国的な規則として歓迎したのである。

6. むすびにかえて

本稿では、まず、明治後期から昭和初期にかけて、日本の労働問題に携わっていた宇野利右衛門と彼が設立した工業教育会による、労働者の居住施設に関する著述の全体像を明らかにした。そのうえで、とくに職工寄宿舎についての著述の内容に着目し、宇野が何をとり上げ、どのように評価したのかを示した。

第 2 章と第 3 章で見たように、宇野は、自ら組織を立ち上げ、使用者とも労働者とも異なる中間指導者としてさまざまな活動を継続的に行った。労働者の居住施設に関しても、現在でいう労務管理の一要素として捉えて、様々な視点から具体的に言及した。参照すべき改善策や事例を示す実践的な態度は、常に弱者の立場に立って労働者の生活の悲惨さを社会に訴えようとしたいわゆる底辺ルポルタージュとは決定的に異なるものであったといえる。

第 4 章では宇野が労働者の居住施設のなかで寄宿舎をどのようにとらえていたのかを示した。宇野は、寄宿舎制度そのものの限界を早くから指摘していたが、その一方で背景にある根本的な問題がすぐには解決できないという現実も認識していた。そうした中で、企業における職工待遇の改善と日本の工業発展という観点から、いかにして問題のある寄宿舎生活を改善し得るかを現実に沿って考え、参照すべき「模範的」事例を提示した。

第 5 章では、職工寄宿舎の建築がどのように評価されたのかを具体的に検討した。宇野は、従来の寄宿舎の形式に拘ることなく、様々な施設や施策を紹介する姿勢を示したが、そこには通底する考えがあったことが読み取れた。そのひとつが、小規模単位の生活を実現することによって、寄宿舎の衛生面、風紀面における改善を図ることであった。もうひとつは、職工の健全な育成と統一的な管理のため、寄宿舎に附属する設備や福利施設、それを支える制度の整備も一体的に捉えることであった。そうした基本的な考えに基づきながら、状況に応じて参照すべきと考える具体的な施設を提示、評価し、あるべき建築の様態を示した。明治後期から昭和初期にかけて、様々な施設や施策のあり方が示されたが、「製糸業に適する寄宿舎」の提示を経て、内務省令の制定に関わる記事が示されるとともに、「模範的」な寄宿舎の建築様態を提示する記事は少なくなり、宇野にとっても社会の実態としても、寄宿舎の建築的な形式を模索する段階を超えたことが窺えた。

本稿では、職工寄宿舎に関する言及のみを取り上げた。次報では、社宅について分析・報告する。

表 1 『職工問題資料』F 輯（模範的職工待遇施設の写真・説明）

輯号	発行年月	題(副題)	収録施設(工場名)
F1	1916.01	設備実況写真(一)	鐘紡兵庫、倉紡万寿
F2～F11		未確認	
F12	1916.12	新工女養成設備と教育娯楽の設備	郡是本社、鐘紡久留米、帝国製麻大阪
F13	1917.01	内外の模範的設備写真	紐育中央電話、アドラ兄弟、ピアス電車、ナショ ナル現金計算器製造、大阪府立修徳館、鐘紡久留米
F14	1917.02	鐘淵紡績大阪支店の職工優遇設備一斑	鐘紡大阪
F15	1917.03	内外に於ける模範設備写真	東京電気川崎、紐育ナショ ナル電球、コルセツト製造、アルダー兄弟商会、紐育電話
F16	1917.04	模範設備写真	帝国製麻大阪、鐘紡大阪、モス綸紡織
F17	1917.05	鐘紡兵庫支店花見会	鐘紡兵庫
F18	1917.06	衛生保安的設備の写真	帝国製麻大阪、東洋紡愛知・尾張
F19	1917.07	模範的設備の写真	小野田セメント本社、桐生撫糸、東洋紡尾張
F20	1917.08	富士瓦斯紡績小山工場の天理教寄宿舎と孟蘭盆会の景況一斑	富士瓦斯紡小山
F21	1917.09	芝浦製作所に於ける模範設備一斑	芝浦製作所
F22	1917.10	水災後に於ける衛生的施設(鐘淵紡績中島支店)	鐘紡中島
F23	1917.11	東京モスリン 紡織に於ける水災防禦装置	東京モスリン 紡織
F24	1917.12	郡是製糸株式会社の光栄	郡是
F25	1918.01	工場除塵装置の実例(帝国製麻大阪工場)	帝国製麻大阪
F26	1918.02	欧米の各種工場に於ける危害予防装置実例	
F27	1918.03	鐘紡京都支店に於ける模範設備	鐘紡京都
F28	1918.04	幼児保育の模範的設備(鐘淵紡績兵庫支店)	鐘紡兵庫
F29	1918.05	東洋紡績王子工場の春季慰安旅行	東洋紡王子
F30	1918.06	模範的施設の写真(モス綸本社、鐘紡京都支店)	モス綸紡織、鐘紡京都
F31	1918.06	模範工場大日本紡績大垣工場設備一斑	日紡大垣
F32	1918.08	模範的設備の写真	鐘紡大阪、日紡大垣、東洋紡四貫島
F33	1918.09	模範的設備の写真	東洋紡四日市、小田原紡織、久原鉦業日立製作所
F34	1918.10	模範的設備の写真	鐘紡高砂保養院・高砂、王子製紙苫小牧、秋田木材
F35	1918.11	模範的設備の写真(鐘紡淀川工場の設備一斑)	鐘紡淀川
F36	1918.12	模範的設備の写真(鐘紡岡山絹糸工場、倉紡玉島)	鐘紡岡山絹糸、倉紡玉島
F37	1919.01	工場の年中行事(相模紡績の運動会)	相模紡平塚
F38	1919.02	相模紡績の新設備	相模紡平塚
F39	1919.03	大日本紡績大垣工場の男工寄宿舎	日紡大垣
F40	1919.04	模範的設備の写真	浅野造船所、日紡大垣
F41	1919.05	帝国製麻大阪工場の自修舎其他	帝国製麻大阪
F42	1919.06	東洋紡績王子支店の新築寄宿舎	東洋紡王子
F43	1919.07	夏季の模範的設備、其他(鐘紡大阪支店)	鐘紡大阪
F44	1919.08	大阪市営労働者待遇設備の写真	大阪市営築港・今宮
F45	1919.10	欧米における模範設備	クラブ、リバーブラザーズ石炭、アブリコークス石炭、ナショ ナルチューブ、アルゲマイネ電気、オリバー鉦業、シーゼビーエン ドツニス、ブルクリンラビット運送、ユチカ工具、イーストマンコダック、ラーゼ製鋼、アメリカ安全博物館
F46	1919.09	模範的設備の写真(東洋紡績四貫島工場)	東洋紡四貫島
F47	1919.11	福紡堺支店の新築寄宿舎	福紡堺
F48	1919.12	模範的設備の写真	東洋紡王子、大阪市営西野田・今宮
F49	1920.01	近江療養院の内容	近江療養院
F50	1920.02	模範設備の写真	富士瓦斯紡保土ヶ谷、横浜電線製造、近江療養院
F51	1920.03	東洋紡績四貫島工場の社宅に於ける設備	東洋紡四貫島
F52	1920.04	日本毛織岐阜工場に於ける模範的設備	日本毛織岐阜
F53	1920.05	模範設備の写真(東洋紡績津嶋工場 大日本紡績一ノ宮工場)	東洋紡津島、日紡一宮
F53	1920.06	模範的設備の写真(東洋紡績知多工場)	東洋紡知多
F54	1920.07	東洋紡績富田工場の模範的設備	東洋紡富田
F55	1920.08	模範設備の写真(大日本紡績大垣工場)	日紡大垣
F56	1920.09	模範設備の写真(両毛整織株式会社 日本絹撫株式会社)	両毛整織、日本絹撫本社
F57	1920.10	鐘紡高砂保養院の設備一斑(一)	鐘紡高砂保養院
F58	1920.11	鐘紡高砂保養院の設備(二)	鐘紡高砂保養院
F59	1920.12	鐘紡高砂保養院の設備(三)(松風寮と療養社宅)	鐘紡高砂保養院
F60	1921.01	東洋紡績四貫島工場の模範的施設(女工のダンス、自修寮茶と花の教習)	東洋紡四貫島
F69(F61)	1921.02	山陽巡回旅行の写真(一)(姫路から相生まで)	日本毛織姫路、福紡姫路、東洋紡姫路、日出紡織姫路、帝国汽船播磨製造所
F62	1921.03	山陽旅行写真(相生より津山まで)	帝国汽船播磨造船所、鐘紡岡山絹糸、鐘紡西大寺・岡山・備前、郡是津山
F63	1921.04	山陽旅行の写真(三)	倉紡倉敷・万寿・玉島、福紡福山、大阪鉄板徳山

F64	1921.05	福紡徳島支店の設備一斑	福紡徳島
F65	1921.06	三菱長崎造船所の職工待遇設備	三菱長崎造船所
F66	1921.07	東洋紡績川ノ石工場の設備一斑	東洋紡川ノ石
F67	1921.08	鐘紡九州療養所概観(熊本県日奈久温泉場所 在)	鐘紡日奈久療養院
F68	1921.09	倉紡四国各工場の設備	倉紡高松・阪田・松山
F69	1921.10	四国各工場の職工待遇設備	今治紡、興業倉、愛媛綿布、近江帆布八幡浜
F70	1921.11	鐘紡各地工場の模範的設備	鐘紡大阪・高砂・博多・中津・熊本・三池
F71	1921.12	新模範工場日本絹布の設備一斑	日本絹布
F72	1922.01	模範的設備の写真	小野田セメント、旭硝子牧山、日本足袋、深川造船所、日本窒素肥料鐘、東洋陶器
F73	1922.02	模範施設の写真	東洋紡四貫島・姫路、倉紡万寿
F74	1922.03	鐘紡各店の設備	鐘紡備前・岡山・博多・熊本・中津
F75	1922.04	日本絹布見学会記念写真	日本絹布
F76	1922.05	大阪合同紡績神崎支店の設備	大阪合同紡神崎
F77	1922.06	模範設備の写真(柏原紡織の設備と倉敷万寿工場の自修寮)	柏原紡織、倉紡万寿
F78	1922.07	東京方面の工場に於ける模範的施設(一)(日本製麻赤羽工場と富士瓦斯紡川崎工場)	日本製麻赤羽、富士瓦斯紡川崎
F79	1922.08	東京方面模範的設備(二)	鐘紡東京、星製菓
F80	1922.09	東洋紡績四貫島工場の新築寄宿舎と帝國製麻大津製品工場の施設一斑	東洋紡四貫島、帝國製麻大津製品
F81	1922.10	東京方面の模範的設備(三)(鐘紡東京本店、東洋紡王子工場)	鐘紡東京、東洋紡王子
F82	1922.11	模範的設備の写真(四国の二工場)	倉紡高松、大阪合同紡小松島
F83	1922.12	模範的設備の写真	東京モスリン 亀戸、富士瓦斯紡川崎、鐘紡東京、東洋紡王子、倉紡万寿・高松、福紡徳島
F84	1923.01	模範設備の写真	鐘紡新町、日紡練馬、富士瓦斯紡小山、福紡徳島
F85	1923.02	東洋紡績津島工場の歌劇会写真(職工の娯楽慰安)	東洋紡津島
F86	1923.03	模範的施設の写真(玉置綿布、日本絹毛、大日本紡大垣等)	玉置綿布尾崎、日本絹毛岐阜、日紡大垣
F87	1923.04	社宅及び其附属設備(鐘紡兵庫支店)	鐘紡兵庫
F88	1923.05	模範的設備の写真(鐘紡下京工場の設備一斑)	鐘紡下京
F89	1923.06	模範的設備の写真	日紡福島、郡是本社
F90	1923.07	模範的設備の写真(日本毛織、加古川、印南両工場)	日本毛織加古川、日本毛織印南
F91	1923.08	樹木と水の大垣	日紡大垣、東京毛織大垣、中央毛糸紡大垣
F92	1923.09	倉紡中央病院の写真(上)	倉紡中央病院
F93	1923.10	倉紡中央病院の設備(下)	倉紡中央病院
F94	1923.11	上海の紡績工場	公大紗廠、内外綿
F95	1923.12	国際労働会議とジュネーブ	
F96	1924.01	地上の理想国スイス(E号記事参照)	
F97	1924.02	白耳義の人民の家	
F98	1924.03	ガン市に於ける「我等の家」	
F99	1924.04	北仏の戦跡に於ける工場の破壊と回復	
F100	1924.05	国際聯盟と労働事務局	
F101	1924.06	震災の跡片附けと復興(一)	東洋紡王子
F102	1924.07	震災の跡整理と復興	東洋モスリン、日紡橋場、鐘紡東京
F103	1924.08	震災の跡整理と復興(三)	富士瓦斯紡川崎
F104	1924.09	鐘紡岐阜製糸工場に於ける模範的設備一斑	鐘紡岐阜製糸
F105	1924.10	模範的の大食堂(鐘紡京都支店)	鐘紡京都
F106	1924.11	鐘紡京都従業員慰安の設備と内外綿第二裁縫手芸品展覧会	鐘紡京都、内外綿第二紡織
F107	1924.12	工場揭示の模範的実例写真 模範的待遇設備の写真	近江帆布苅浦・味野、日紡福島、堺福助足袋、鐘紡大阪、大阪合同紡住吉、
F108	1925.01	模範的施設の写真(東洋紡績四貫島工場)	東洋紡四貫島
F109	1925.02	模範的施設の写真	内外綿第二紡織、合同紡天満
F110	1925.03	鐘紡工場設備一斑	鐘紡淀河晒染
F111	1925.04	鐘紡淀川工場設備一斑(二)	鐘紡淀川
F112	1925.05	鐘紡淀川工場設備一斑(三)	鐘紡淀川
F113	1925.06	模範的施設の写真	鐘紡淀川、郡是今市、出雲製織、東洋紡四貫島
F114	1925.07	模範的施設の写真	帝国製麻大阪、東洋紡王子、片倉製糸大宮、東京モスリン 金町・亀戸・吾郷
F115	1925.08	鐘紡中島支店の病院と男工寄宿舎	鐘紡中島
F116	1925.09	鐘紡診療所の写真(上)	鐘紡兵庫
F117	1925.10	鐘紡診療所の写真(二)	鐘紡兵庫
F118	1925.11	東洋紡績伏見工場の設備(一)	東洋紡伏見
F119	1925.12	東洋紡績伏見工場の補強工事と社宅農園	東洋紡伏見
F120	1926.01	大阪合同紡績神埼支店の設備一斑	大阪合同紡神埼
F121	1926.02	東洋紡績四日市工場の設備一斑(上)	東洋紡四日市
F122	1926.03	東洋紡績四日市工場の設備一斑(二)	東洋紡四日市
F123	1926.04	大日本紡績一宮工場の設備一斑	日紡一宮
F124	1926.05	大日本紡績一宮工場の設備一斑(下)	日紡一宮
F125	1926.06	欧洲に於ける義足義手の進歩	
F126	1926.07	大日本紡績山崎絹糸工場の設備一斑	日紡山崎

F127	1926.08	労働者宿泊所の模範(大阪市立長柄共同宿泊所)	大阪市立長柄共同宿泊所
F128	1926.09	復興したる東洋紡績王子工場の設備一斑	東洋紡王子
F129	1926.10	鐘紡の耐震補強工事一斑(下京絹糸工場に於けるもの)	鐘紡下京
F130	1926.11	各社工場に於ける震災予防の設備	東洋紡西成、日紡山崎、鐘紡下京
F131	1926.12	動力伝導装置に対する安全設備(上)(社会局監督課)	
F132	1927.01	動力伝導装置に対する安全設備(下)(社会局監督課)	
F133	1927.02	豊田紡織株式会社刈谷工場の設備一斑	豊田紡織刈谷
F134	1927.03	鐘紡中島支店の震災予防補強工事一斑	鐘紡中島
F135	1927.04	各社工場に於ける耐震補強設備	鐘紡中島・下京、東洋紡西成、豊田紡織刈谷
F135 F136	1927.04	東洋紡績姫路絹糸工場の施設(一)	東洋紡姫路
F137	1927.06	東洋紡績姫路絹糸工場の設備(二)	東洋紡姫路
F138	1927.07	東洋紡績姫路絹糸工場の設備(三)	東洋紡姫路
F139	1927.08	東洋紡績姫路工場の運動施設	東洋紡姫路
F140	1927.09	東洋レイヨン滋賀工場の設備一斑(一)	東洋レイヨン滋賀
F141	1927.10	東洋レイヨン滋賀工場の設備一斑(二)	東洋レイヨン滋賀
F142	1927.11	鐘紡洲本支店の設備一斑	鐘紡洲本
F143	1927.12	鐘紡洲本支店の設備一斑	鐘紡洲本
F144	1928.01	日清紡績浜松工場の設備一斑	日清紡浜松
F145	1928.02	富士瓦斯紡績小山工場の工場 美化の實況	富士瓦斯紡小山
F146	1928.03	富士瓦斯紡績小山工場の設備一斑(二)	富士瓦斯紡小山
F147	1928.04	鐘紡兵庫支店の観覧会	鐘紡兵庫
F148	1928.05	東洋レイヨンと鐘紡京都支店の設備	東洋レイヨン滋賀、鐘紡京都
F149	1928.06	従業者及其の家族の慰安(東洋紡津工場の汐干狩 錦華紡浪速支店の奈良旅行)	東洋紡津、錦華紡浪速
F150	1928.07	東洋紡績山田工場の設備	東洋紡山田
F151	1928.08	模範的設備の写真(東洋紡績山田工場の設備一斑 和歌山紡織箕島工場の設備一斑)	東洋紡山田、和歌山紡織箕島
F152	1928.09	織物機械に於ける安全装置	
F153	1928.10	愛知県下工場聯合女子従業員手芸品展覧会実況(一)	
F154	1928.11	愛知県下工場聯合女子従業員手芸品展覧会実況(二)	
F155	1928.12	鐘紡淀川支店の食堂及炊事場設備一斑	鐘紡淀川
F156	1929.01	鐘紡淀川支店の設備一斑	鐘紡淀川
F157	1929.02	鐘紡東京本店の設備一斑	鐘紡東京
F158	1929.03	鐘紡山科絹布工場の設備一斑	鐘紡山科絹布
F159	1929.04	食堂及炊事場の模範的設備(東紡姫路と郡是本社)	東洋紡姫路、郡是本社
F160	1929.05	大日本紡績一宮工場の佛教婦人会祭の催、合掌の鐘、其他	日紡一宮
F161	1929.06	余暇善用法としての農業とミシン 裁縫	帝国製麻大阪、日紡一宮、日本毛織岐阜、富士瓦斯紡岐阜
F162	1929.06	種々の催し物	東洋紡
F163	1929.08	東洋紡績富田工場の施設一斑其他	東洋紡富田
F164	1929.09	大日本紡績平野工場の設備一斑	日紡平野
F165	1929.10	大日本紡高田工場の設備一斑と和歌山紡中ノ島工場の旅行	日紡高田
F166	1929.11	危害予防装置の図解	
F167	1929.12	東洋紡績大曾根絹糸工場の設備一斑	東洋紡大曾根
F168	1930.01	大日本紡山崎工場の報恩講其他と姫路工場団の廃物利用展覧会	日紡山崎
F169	1930.02	大日本紡績山崎絹糸工場設備一斑	日紡山崎
F170	1930.03	鐘紡東京本店の設備一斑	鐘紡東京
F171	1930.04	長崎紡績堺工場の設備一斑	長崎紡堺
F172	1930.05	北陸地方紡織三工場の設備一斑	福井紡、日本絹織大聖寺絹紡、錦華紡金澤本店
F173	1930.06	富士瓦斯紡績鷺津工場の設備一斑	富士瓦斯紡鷺津
F174	1930.07	呉羽紡績の設備一斑	呉羽紡呉羽
F175	1930.08	東洋紡績一宮工場の設備一斑	東洋紡一宮
F176	1930.09	東洋紡績一宮工場の設備一斑と愛知県工場福利展覧会	東洋紡一宮
F177	1930.10	昭和レイヨン堅田工場の設備一斑	昭和レイヨン堅田
F178	1930.11	樹木美の日本毛織印南工場	日本毛織印南
F179	1930.12	東京モスリン名古屋製絨工場の設備一斑(寄宿舎の整頓其他)	東京モスリン名古屋製絨
F180	1931.01	模範工場の設備補遺	昭和レイヨン堅田、日本毛織印南、富士瓦斯紡鷺津
F181	1931.02	近江帆布三瓶工場の設備一斑	近江帆布三瓶
F182	1931.03	東洋紡績山田工場の設備一斑	東洋紡山田
F183	1931.04	宮川モスリンの設備一斑	宮川モスリン
F184	1931.05	進歩の極致に達した職工寄宿舎の実例	
F185	1931.06	医務所の必要設備と衛生保健施設	日立鉾山、東洋紡津・四貫島・一宮、鐘紡大阪・淀川・兵庫、明治紡行橋
F186	1931.07	夏季慰安と安全衛生設備	長崎紡堺、鐘紡淀川・高砂・中島・大阪、東洋紡姫路
F187	1931.08	寄宿舎に於ける模範的施設	帝国製麻大阪、富士瓦斯紡鷺津、鐘紡東京、東洋紡一宮・大曾根、日紡山崎

F188	1931.09	慰安、娛樂並に修養の設備と食堂に於けるステージの事例	東洋紡四貫島・一宮・山田、日紡福島、鐘紡淀川、近江帆布三瓶
F189	1931.10	珍らしい設備の写真	近江帆布三瓶、鐘紡京都・淀川・岡山・大阪、両毛整織、倉紡万寿、昭和レーヨン
F190	1931.11	複式浴場、洗濯場及び其の附属設備	東洋紡一宮、鐘紡大阪
F191	1931.12	食堂の附属設備並に宗教宣布の施設	鐘紡京都・淀川、東洋紡富田・一宮・津、日紡一宮
F192	1932.01	大和川染工所の施設一般	大和川染工所
F193	1932.02	教育修養の設備	
F194	1932.03	各種の模範的設備	東洋紡津、鐘紡中島、帝国製麻大阪、昭和レーヨン
F195	1932.04	春麗らか	鐘紡兵庫・高砂療養所、東洋紡山田・富田、和歌山紡中ノ島、日紡岐阜・一宮・山崎
F196	1932.05	模範的食堂及炊事場の設備	郡是本社、鐘紡兵庫・大阪、倉紡倉敷
F197	1932.06	家庭化された工場寄宿舎	
F189 (F198)	1932.07	工場附属設備の模範	東洋紡、日紡明石、東洋紡王子、鐘紡京都、芝浦製作所、東洋紡姫路、近江帆布三瓶
F199	1932.08	思想善導の施設	
F200	1932.09	衛生的施設と医療機関	鐘紡淀川・東京・高砂療養所、日立鉾山
F201	1932.10	婦女労働者に対する待遇施設一斑	
F202	1932.11	寄宿舎に関する模範的施設	
F203	1932.12	工場内設備の種々相	
F204	1933.01	従業者待遇施設の模範例	
F205	1933.02	従業者優遇の設備例	
F206	1933.03	工場食事に關する設備	
F207	1933.04	従業者優遇施設の種々相	東洋紡山田・一宮、鐘紡東京
F208	1933.05	大日本紡績東京工場の施設一斑	日紡東京
F209	1933.06	東洋紡績工場偉觀の一部	東洋紡四日市・大曾根・一宮・赤穂・富田・姫路・山田、昭和レーヨン堅田
F210	1933.07	東洋紡績の従業員待遇施設(一)	東洋紡津・山田・姫路
F211	1933.08	東洋紡績の待遇施設一斑(三)	東洋紡・山田
F212	1933.09	東洋紡績の医療設備一斑	東洋紡姫路
F213	1933.10	北陸カメヲ旅行のみあげ(一)	日東紡金澤、日清紡高岡・富山、天満織物笹津
以降、未確認			

リストの作成にあたっては、おもに法政大学大原社会問題研究所、京都大学経済学研究科・経済学部図書室の所蔵資料を用いた。表記は旧字体を新字体に改めた。

参考文献

- 間宏：日本労務管理史研究，御茶の水書房，1978
- 間宏：日本における労使協調の底流，早稲田大学出版部，1978
- 杉原薫，玉井金五：大正大阪スラム，新評論，1986
- 間宏：日本労務管理史資料集，五山堂書店，1987-1993
- 大原社会問題研究所雑誌，No. 363・364，1989
- 砂本文彦：鷺尾勘解治と新居浜・住友山田団地について，日本建築学会計画系論文集，No. 519，pp. 271-278，1999. 5
- 立花雄一：明治下層記録文学，筑摩書房，2002
- 角哲，角幸博，池上重康：新日本製鐵(株)釜石製鐵所の社宅街について：小佐野社宅(1936～37)，小川社宅(1940～41)，日本建築学会計画系論文集，No. 557，pp. 319-325，2002. 7
- 藤田貞一郎：近代日本経済史研究の新視角，清文堂，2003
- 玉井金五，菊池光造：社会政策研究与地域，地域と社会，No. 6，大阪商業大学，2003
- 角哲，角幸博，石本正明：樺太における王子製紙株式会社社宅街について，日本建築学会計画系論文集，No. 577，pp. 173-179，2004. 3
- 角哲，角幸博，池上重康：王子製紙(株)苫小牧工場社宅街について，日本建築学会計画系論文集，No. 619，pp. 165-172，2007. 9
- 社宅研究会：社宅街　企業が育んだ住宅地，学芸出版社，2009
- 阿部武司，中村尚史：講座・日本経営史 2　産業革命と企業経営，ミネルヴァ書房，2010
- 佐々木聡，中林真幸：講座・日本経営史 3　組織と戦略の時代，ミネルヴァ書房，2010
- 中野茂夫，平井直樹，藤谷陽悦：倉敷紡績株式会社の寄宿舎・職工社宅の推移と大原孫三郎の住宅施策　近代日本における紡績業の労働者住宅その1－，日本建築学会計画系論文集，Vol. 76，No. 659，pp. 193-202，2011. 1
- 山田智子，大場修：郡是製絲株式会社本社・本工場における社宅の形成過程，日本建築学会計画系論文集，Vol. 76，No. 667，pp. 1675-1684，2011. 9

注

- 注 1) かつては、一様に劣悪な環境として見られていたが、参考文献 6)、8)、11)、12)、13)、16)、17)ほか最近の個別研究によって実態が明らかにされつつある。
- 注 2) 参考文献 2)、4) など間宏氏による一連の研究がある。
- 注 3) 参考文献 3) 杉原薫「日本における近代的労働＝生活過程像の成立」。
- 注 4) 参考文献 9)。
- 注 5) 参考文献 10)。
- 注 6) 参考文献 5) 76 頁で立花雄一が協調会文庫の解説の中で指摘している。
- 注 7) 日本建築学会編『近代建築学発達史』（1972 年）において、わずかながら取り上げられている。また、『職工問題資料』に掲載された社宅に関する記事については、参考文献 13) に所収の池上重康「『職工問題資料』から見た社宅の先進性」で紹介している。
- 注 8) 参考文献 4)。
- 注 9) 「年賀交換会」（『大工業』第 2 巻第 1 号、1919 年）。
- 注 10) 『職工問題資料』D・E 輯についても参考文献 2) で、G 輯については参考文献 3) でリスト化されている。
- 注 11) 「社宅改善論」（『職工問題資料』A11・12・13、1910-1911 年）。
- 注 12) 「工男待遇及び訓育策」（『職工問題資料』A23・28、1911 年）。
- 注 13) 「倉紡の職工待遇法」（『職工問題資料』A25・27・30・36、1911 年）。
- 注 14) 「小野田セメントに於ける職工造家助成法」（『職工問題資料』A106・110、1913 年）。
- 注 15) 「最も進歩せる職工社宅（合同紡績神崎支店の新社宅）」（『職工問題資料』A114、1913 年）など。
- 注 16) 「理想的職工住宅設計の懸賞図案披露」（『職工問題資料』A293・286、1918 年）、「職工社宅の研究」（A353・355・358・361、1920 年）など。
- 注 17) 本稿の第 5 章第 3 節で詳述する。
- 注 18) 笠原一人「雑誌『デザイン』の概要と特徴について」（『日本建築学会大会学術講演梗概集』F-2、2004 年）によれば、本名を江村恒一といい、『工業之大日本』のほか、『関西建築協会雑誌』、『建築と社会』、『デザイン』の各誌の編集に関わっていたとされる。
- 注 19) 「英国の職工住宅法と我国の職工長屋」（『工場法雑誌』第 1 巻第 7 号、1918 年）。片岡安は建築家で内務省都市計画調査委員を務めた。1897 年工学士。
- 注 20) 「住宅経営と地相」（『大工業』第 2 巻第 2 号、1919 年）。葛野壮一郎は横河工務所、神奈川県庁、大阪府技師を経て建築事務所を自営した。1905 年工学士。
- 注 21) 「住宅問題と其の変遷」（『大工業』第 3 巻第 4 号、1920 年）。大熊喜邦は横河工務所、大蔵省技師を経て臨時議院建築局工営部調査課長兼公務課長を務めた。1919 年工学博士・1943 年経済学博士。
- 注 22) 「都市計画としての住宅政策」（『大工業』第 2 巻第 3 号、1919 年）。関一は社会政策学者で大阪市助役から後に市長になった。1910 年法学博士。
- 注 23) 「鉦夫長屋の改善に就いて」（『大工業』第 3 巻第 4 号、1920 年）。石原修は初代鉦務兼工場監督官を務め、後に ILO 会議に政府委員として出席した。1921 年医学博士。
- 注 24) 「英独に於ける住宅改良策」（『大工業』第 2 巻第 2 号、1919 年）。豊原又男は社会事業家で後に東京府社会事業協会中央工業労働紹介所をつくって所長となった。
- 注 25) 「住宅問題と田園都市」（『大工業』第 2 巻第 9・10・11 号、1919 年）。三宅勘一は都市事情研究会に所属し、『住宅問題と田園都市』（1919 年）を著したことで知られる。
- 注 26) 宇野利右衛門「職工問題解決上に於ける住宅改良の価値」（『大工業』第 2 巻第 2 号）。
- 注 27) 「旧来の職工社宅一例」（『大工業』第 2 巻第 2 号、1919 年）。
- 注 28) 「理想的職工社宅設計図案 発表」（『大工業』第 2 巻第 2 号、1919 年）。
- 注 29) 宇野利右衛門「職工の住宅問題に就いて」（『大工業』第 3 巻第 4 号、1920 年）。
- 注 30) 「各社に於ける職工社宅の実例」（『大工業』第 3 巻第 4 号、1920 年）。
- 注 31) 「題言」『職工問題資料 第一輯』（1912 年）。
- 注 32) 参考文献 9) 225 頁で「宇野利右衛門による『資料』（筆者注：『職工問題資料』を指す）は、産業資本家の立場にたって、日本における工業発展を願い、それを支える通勤職工を基本形態とする賃金労働者層の確立を

呼びかける一大啓蒙活動であった」と述べている。

- 注 33) 「通勤、寄宿舍、社宅三制度の比較」『職工問題資料 第二輯 職工の住居と生活』（1913 年）。
- 注 34) 前掲「職工の住宅問題に就いて」。
- 注 35) 参考文献 16) 参照。元の記述は、1901（明治 34）年の農商務省商工局の調査をまとめた『職工事情』の記述に基づく。
- 注 36) 前掲「倉紡の職工待遇法」。
- 注 37) 「模範的設備の写真 4」（『職工問題資料』A117、1913 年）。
- 注 38) 「福紡堺支店の新築寄宿舍」（『職工問題資料』F47、1919 年）（『大工業』第 3 巻第 4 号、1920 年）。
- 注 39) 「倉紡松山工場に於ける分散式寄宿舍」（『職工問題資料』A382、1921 年）。
- 注 40) 「鐘淵紡績大阪支店の職工優遇設備一班」（『職工問題資料』F14、1917 年）。
- 注 41) 「富士瓦斯紡績小山工場の天理教寄宿舎と孟蘭盆会の景況一班」（『職工問題資料』F20、1917 年）。
- 注 42) 「模範工場大日本紡績大垣工場設備一班」（『職工問題資料』F31、1918 年）。
- 注 43) 「模範的設備の写真（鐘紡岡山絹糸工場、倉紡玉島）」（『職工問題資料』F36、1918 年）。
- 注 44) 「相模紡績の新設備」（『職工問題資料』F38、1919 年）。
- 注 45) 「東洋紡績王子支店の新築寄宿舍」（『職工問題資料』F42、1919 年）。
- 注 46) 「模範的設備の写真（鐘紡下京工場の設備一班）」（『職工問題資料』F88、1923 年）。
- 注 47) 『製糸工場資料』第 7 号から第 11 号（1921 年）とみられるが、現存が確認できているのは、第 10 号と第 11 号のみである。
- 注 48) 前掲「工男待遇及び訓育策」。
- 注 49) 前掲「模範的設備の写真 4」所収の鐘淵紡績兵庫支店男工寄宿舍（写真 4）と類似していることから鐘淵紡績の各支店を指すものと推測される。
- 注 50) 「職工の住居政策に就て 3：男工寄宿舍」（『職工問題資料』A284、1918 年）、「大日本紡績大垣工場の男工寄宿舍」（『職工問題資料』F39、1919 年）、「模範的設備の写真（東洋紡績四貫島工場）」（『職工問題資料』F46、1919 年）、「模範設備の写真（大日本紡績大垣工場）」（『職工問題資料』F55、1920 年）。
- 注 51) 「模範的男工寄宿舍設計図」（『大工業』第 3 巻第 4 号、1920 年）。
- 注 52) 「長野県発布の職工寄宿舍規則」（『職工問題資料』A227、1916 年）。原文については、小冊子『長野県工場及附属建設物取締規則』を参照。
- 注 53) 「職工寄宿舍の標準的取締規則：愛媛縣の新法令」（『職工問題資料』A369、1920 年）。
- 注 54) 「工場附属寄宿舍規則の制定発布」（『職工問題資料』A598、1927 年）。
- 注 55) 「工場附属寄宿舍規則施行細則」（『職工問題資料』A606・609・612・615・620・621・624・628、1927 年）。
- 注 56) 「工場附属寄宿舍取締規則各條義解」（『職工問題資料』A616・619・622、1927 年）。元の記事は、『社会政策時報』1927 年 6 月・7 月に掲載されたものである。
- 注 57) 前掲『職工事情』の記述に基づく。関西各県では、寄宿舍が設けられ各室の広さは 10 畳乃至 20 畳のものが多かったという。
- 注 58) 『製糸及染色工場ニ於ケル寄宿舍ノ現況』（農商務省商工局、1919 年）による。1917 年 8 月に全国における製糸及染色工場 534 工場の寄宿舍を調査したものである。
- 注 59) 前掲「工場附属寄宿舍取締規則各條義解」。
- 注 60) 本稿では、居室の大きさについて、1 坪を 2 畳として換算している。

図版出典

- 図 1 『大工業』第 3 巻第 4 号（1920 年）
- 図 2 『大工業』第 3 巻第 4 号（1920 年）
- 写真 1 『職工問題資料』A25（1911 年）
- 写真 2 『職工問題資料』A117（1913 年）
- 写真 3 『職工問題資料』F31（1918 年）
- 写真 4 『職工問題資料』A117（1913 年）
- 写真 5 『職工問題資料』F51（1920 年）
- 写真 6 『職工問題資料』F55（1920 年）

（2012年12月10日原稿受理，2013年 3 月28日採用決定）